
ジンと蘭の馴れ初めの秘密

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジンと蘭の馴れ初めの秘密

【NZコード】

N1674P

【作者名】

コーリ

【あらすじ】

『FBIから来た女』シリーズの番外編小説。ジンと蘭の出会いの秘密とは、果たして・・・?この小説はジン×蘭です。異色カッティングが苦手な方はご遠慮下さい。

誰もが気になつてゐるだらう・・・

黒の組織で最強と恐れられたジンと、端から見れば一般的な女子高生である毛利蘭の、あまりに不可思議なカップルを。

今宵はこの2人がどうやって知り合い、そして仲良くなつたのかの経緯・・・

馴れ初めについて教えよつ・・・

それはちゅうび、ジンが模範囚として釈放された時までさかのぼる・・・

ジンは夜食を買つため、コンビニを訪れていた。

ちなみにジンは今江古田町に住んでいる。

ウォッカとは別々暮らしだ。

ジン

「フウ・・・なかなか手掛かりが見つからんな。娘達も頑張つてくれてるし、オレ一人だけが気を抜くワケにはいかないんだが・・・」

ジンはため息をつきながら、コンビニで日当りの物を購入し、コンビニを出た。

「なんだ、オマエ！」

「オレ達がこの辺をシマにしてるグループ『ギネス』と知ってケンカ売つてんのか？」

ジン
「ん？」

コンビニを出たジンの耳に、言い争う声が聞こえてくる。

ジンが声のした方に向かうと、そこには1人の少女が3人の男に囲まれていた。

「あなた達が誰かなんて関係ないよ。万引きしたでしょって言ってんの！」

「バ、バカ言え。オレ達は何も盗んでねえよー！」

「ハアツ！！」

少女はいきなり男のカバンに蹴りを入れる。

ビュッ！

「あつ！」

カバンが開くと、雑誌がいくつか落ちてきた。

「サドサツ！」

「ホラ、あるじゃない。」

「テメエ、調子に乗んなよ。」

「ガキだからって容赦しねえ。痛めつけやる！...」

男達は今にも少女に飛びかかるとする。

見かねたジンは、少女の前に飛び出した。

ジン

「待てや、オマエら。」

「な、何だテメエ！」

ジン

「オレが何者かなんてどうでも良いだろ？が。問題はオマエらが万引きした事だろ。」

「テメエ、このガキの仲間か！」

「見られちまつたもんは仕方ねえ。コイツらとまつちまえーーー！」

男達はジンに飛びかかる。

ジン

「しゃあねえな・・・」

ジンはため息をつべと、回し蹴りであつとこいつ間に男達を蹴散らした。

ドゴォーー

「ガハツーー」

「ハ、コイツ……強え……」

男達は地面に沈む。

ジン
「つたく、最近のガキは親の教育も満足に受けてねえのか?」

ジンは近くにあつた交番に行き、巡査達に男達を連行してもらつた。

ジン

「片づいたか。おい、嬢ちゃん大丈夫か?……おい?」

ジンは少女の元に駆け寄り、オーティに手を当てる。

ジン

「うわっ、スゴい熱じゃねえか!こんな状態でムチャしてやがったのか!」

ジンは少女を抱きかかえ、マンションへと戻つて行つた。

ジンは少女をベッドに寝かせる。

ジン

「成り行きで連れて来ちまつたが、どうしたもんかね。とりあえず、風邪薬でも作ってやるか。」

ジンは台所に行くと、風邪薬を作り始めた。

『ある酒』を入れた薬を・・・

ジン

「おー、起きろ嬢ちゃん。」

「ん・・・」

ジンの声で、少女は静かに目を覚ました。

ジン

「飲め。」

ジンは持つて来た風邪薬を少女に差し出す。

「ん・・・」

少女はゴクゴクと風邪薬を飲んだ。

ジンは何か作つてやるの?と思い、台所に向かった。

そして30分後、ジンが少女を呼びに来たその時・・・

「う・・・あ・・・」

ジン

「おい、どうした?」

突然少女が苦しみだしたのだ。

「あああああーっ!ー!」

少女が叫んだ次の瞬間、ジンは田を疑つた。

何と、少女が見る見るうちに成長したのだ。

そう、少女の正体は毛利蘭であった。

そしてジンが飲ませた薬には、バイカルが含まれていたのである。

ジン

「オマエ・・・誰だ?」

蘭

「・・・私?私は毛利蘭・・・つて、え?」

蘭は自分の体を見た。

当然ながら、服は弾け飛んでいた。

蘭

「キヤアアアアアアーー！」

ジン

「ま、待て！何か勘違いしてるぞ？」

蘭

「問答無用ーー！」

蘭はジンに回し蹴りを撃つてきた・・・

ジン

「・・・落ち着いたか？」

蘭

「ええ、ゴメンナサイ。取り乱してしまって・・・」

ジン

「別に良い。それより、なぜあんな姿になっていたのか説明してもらおうか？」

蘭

「私はある男達が宝石を盗んでる所を目撃したの。私は男達に見つかって逃げたんだけど、捕まってしまって・・・何か薬を飲まされて、あの姿になつてたの・・・」

ジン

「それ……APT-X^{アボトキシン}4869じゃねえのか?」

蘭

「薬の名前、知ってるの?」

ジン

「ああ。なぜならその薬は、オレの所属していた組織で作られた薬だからな……」

蘭

「……よく見たらあなた、あのジョン・ヒースターの事件の時現場にいたわよね?」

ジン

「あ……」

蘭

「あなたでしょ!一新一をどこかにせつたのはー…わあ、やべいやべつけられましたか白状しなやーー!」

蘭の回し蹴りが、またもジンに炸裂した……

ジン

「……落ち着いたか?」

蘭

「ゴメンナサイ、2度も取り乱してしまって……」

ジン

「別に良いんだがな。それで、話の内容は理解できたか？」

蘭

「ええ、大体は。つまりあなたはその組織の上位幹部だつたけど、もう組織を裏切つたのね？」

ジン

「ああ。元々目的があつて組織に入つてたからな。」

蘭

「それにしても驚いたわ。新一だけじゃなく、科学者の人もその薬で小さくなつてたなんて。宮野志保さんだっけ？」

ジン

「そうだ。ついこの間まで、オレが執拗に行方を探していた女だ。今は工藤新一と共にいる。」

蘭

「そつ・・・新一も心変わりしたつて事ね。」

ジン

「良いのか？オマエはヤツが好きだつたんだろ？」

蘭

「ええ。かつては大好きだつたわ。でも黒羽君の家で過ぐす内に考えるようになったの。もしかしたら私の新一への気持ちは家族愛だつたんじゃないかなってね。」

ジン

「家族愛・・・」

蘭

「幼なじみって結構そういうものよ。お父さん達みたいに結婚までいぐのは、よっぽど両想いじゃないとね。」

ジン

「・・・心が強いんだな、オマエは。」

蘭

「これでも元刑事と弁護士の娘だからね。」

ジン

「そうか。ん? オマエ、ちよつと後ろを向いてくれないか?」

蘭

「良いけど?」

蘭はサツと後ろを向いた。

ジン

「似ている・・・畠野明美に・・・」

蘭

「富野明美って、志保さんのお姉さん?」

ジン

「そうだ。オレが殺してしまったんだ。」

蘭

・

「『殺してしまった』って事は、本当は殺したくなかったの？」

ジン

「ああ。なぜならオレは明美が好きだったからな。」

蘭

「話を聞かせてくれない？」

ジン

「ああ。明美は妻によく似ていてな。それに加えてとても優しい女だつたんだ。幹部1冷酷だと言われ、忌み嫌われていたオレに初めて優しく接してくれた女だつた・・・一目惚れだつたよ、あれは・・・オレがシェリーと積極的に交流していたのは、明美と仲良くなりたかつたからだつた。だがアイツには恋人がいた。ライ・・・赤井秀一がな。」

蘭

「赤井さん、元組織の一員だつたの？」

ジン

「ああ。ヤツがFBIだと知つたのは、組織から消えた後だつたがな。それから上は明美を咎めるようになつた。スパイを入れた上、あまつさえ恋人関係になつたオマエに責任があると。オレは何度も明美を庇つた。だがその行動は報われなかつた。あの日・・・」

ジン『宮野明美を肅正しろですつて！？』

『そうだ。裏切りの芽は早めに摘んでおかないとな。』

ジン『待つて下さい！責任は私にあります。私がどんな裁きでも受けますから・・・』

『ならぬ。必ず始末しろ。オマエの手でな。』

ジン『そんな・・・』

ジン
「オレの手で始末しろ、そう言われた。オレは明美を殺したフリをして彼女を匿うつもりでいた。だがそれは無理だつた。監視がついていたからな・・・そして・・・」

ジャキ！

ジン『う・・・』

明美『ジン・・・泣いてるの？』

ジン『許せ、宮野明美よ・・・』

ガウン！！

ドサツ！

ウォツカ『ア、アニキ・・・』

ジン『ウォツカ・・・オレの車に乗つて先に帰つてろ。オレは歩いて帰る。』

ウォツカ『は、はい！・』

タタタ・・・

ジン『明美・・・明美・・・うわあああああー！』

蘭

「そんな事があつたの・・・」

ジン

「それからオレは組織を潰すために色々と調べ始めた。組織を牛耳

るヤツらの事や、オレの妻を殺したヤツの事を・・・そして、オレは工藤新一達に協力する事にしたんだ。」

蘭 「じゃあ、今あなたは新一の味方なのね？」

ジン 「そういう事になるな。」

蘭

「それを聞いて安心したわ。」

ジン

「オレには前妻との間にできた娘がいる。ソイシを守るためにでもあるんだ。」

蘭 「・・・アタシ、決めた！――」

ジン

「決めた？何をだ？」

蘭

「アタシ、あなたの彼女になる！――」

ジン 「な、何言って・・・」

蘭

「ダメなの？」

ジン

稿

「あなたの人柄に惹かれたから・・・じゃダメ?」

ジン

「言つとくが、オレは子持ちだぞ。そんなのと一緒にになつて、迷惑ではないのか？」

蘭

「全然。むしろその方が良いわ。新しいアタシを見つけるためには、多分新一じゃダメなんだと思う。」

ジン

「後悔する気なら始めから言わないわよ。」

「（眞が強ニ女だな・・・）わかった。アーリアド麗へのなれいへんが
ついてやめよ。」

蘭 ジン。

ジハ
一九四〇年三月二日

「蘭」
「ヘンゼン」の字

こうして、蘭とジンは恋人同士になつたのだが……

ジン

「・・・とまあ、こんな事があつてな。」

コナン

「なるほどな。だけど一つだけ言わせてくれ、ジン。」

ジン

「何だよ?」

哀

「あなた達つて・・・バカップルなのね。」

ジン・蘭

「・・・」

ジンと蘭は、しばらく赤面していた・・・

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1674p/>

ジンと蘭の馴れ初めの秘密

2010年11月27日13時56分発行